8. 教育・福祉学部

研究の概況

舟橋　厚

未曾有の大不況や新型インフルエンザがまさに全世界を覆いつくそうとする時代を私たちは今生きています。こんな時代だからこそ、「人として生きる価値」や「生きる意味」に真正面から取り組んだ研究が貴重なのではないでしょうか。

科学的な研究姿勢とパーソンセンタード・ケアの両者を「療育のための総合科学（療育科学）」としてアウフヘーベン（止揚）し、心身に発達障害のある人々の人生に直接貢献することが教育福祉学部の重要な責務です。行動科学的研究手法（調査法、心理検査法、観察法、面接法など）を駆使し、心身の発達に障害のある人たちへの1）発達・学習支援、2）地域社会生活上の社会的、教育的、心理的および福祉的支援、さらに、3）コロニー内外での施設や地域社会の療育担当職員やご家族などの療育方法や学術的支援、などに関する研究を室長1名（舟橋）、研究員2名（長谷川、竹澤）、研究助手1名（慶野）が中心となり、それを兼任部長の鈴木が支援する形で行いました。

各研究室の研究活動

以下に各研究室の本年度の研究概要を述べますので、ご意見、ご要望などをいただけましたら、幸いです。

発達教育研究室：

心身の発達にどんな障害があっても、パーソンセンタード・ケアとケアリングを基軸とした「あなたの個性」に合わせたオーダーメードの教育や療育を支援者サイドがプロデュースできれば、障害のある人は、家族や仲間と楽しく、生き生きと、そして自信をもって社会生活を送ることが可能です。このようなアプローチを大切にして、発達教育研究室では自閉症スペクトラム障害のある子どものための対人・コミュニケーションの発達支援方法に関する研究を今年も継続しました。さらに発達障害のある子どもの家族の支援方法に関する研究も進め、コロニープロジェクト研究の一環として「広汎性発達障害児の養育者に対するサイコエデュケーションプログラムの開発」に取り組みました。このほかに愛知県立春日台養護学校の「サポートネットワーク会議」に参加するなど、コロニー内施設との連携を深めるとともに、春日井市が主催する子育て教室や子育てネットワーク会議に参加するなど、地域支援にも積極的に取り組みました。

共生福祉研究室：

日常、重度知的障害や重い自閉症のある方などが起こす“行動”は障害のない一般の方々には“問題行動”と間違って把握されがちです。この“問題行動”を「のっぴきならない本人の心の叫び（情動の生起）」と捉え、“問題行動”の背景にある心と脳の関係を謎解きすることが、障害のある人と障害のない人のお互いの「心のインターフェース」として役立つのではと思います。共生福祉研究室では、療育の日常エピソードを脳理論からわかり易く解説した記事を「教育と福祉の特別支援ジャーナル」WEB版（コレール社）に昨年から引き続き連載し、また脳の発達の理論的な解説も掲載した書籍（「療育に活かす脳科学」コレール社）を刊行し、ご家族や療育支援スタッフの方々が障害のあるご本人をよりよく理解し受容できるように支援しました。

また、パーソンセンタード・ケアによる療育研究については乗馬療法を題材として、特に乗馬活動中に促進されたコミュニケーション行動が乗馬療法経験後の日常生活での行動にも反映・維持される現象を解析し、この現象の説明には扁桃体の働きを基礎とした神経心理学的な情動（快・不快）モデルによる「快情動場理論」を構築し、心の状態（場）の解析に量子力学的な考え方が有効であることを提案しました。

また、数年前に実施した「重症心身障害のある人への医療の実態に関する調査」（調査対象：名古屋市を除く愛知県内で地域生活を送る人全員）から日中活動に関する実態およびニーズに関する部分を国際知的障害研究協会第13回大会（南アフリカ）で発表しました。

重症心身障害のある人たちの生活実態やニーズに関する大規模かつ系統的な調査は世界的に稀で、これらの人たちの理解と支援の促進のために世界的に貴重であると高く評価されました。

このほかコロニー中央病院小児神経科から地域の医療機関に紹介された人たちを対象とした「現在の状況や心境について」の追跡調査に参画し、医療機関相互の有機的連携とセーフティネットの構築の要望がユーザー側から強いことを示しました。（詳細は「平成20年度愛知県心身障害者コロニープロジェクト研究報告書」をご参照ください。）

障害のある方々の息遣いを感じられる研究をめざして

発達障害のある方を支援する研究には分子・細胞レベルから「個性豊かなかけがえのないあなた自身」を扱うレベルまで、多様な支援方法があります。教育福祉学部は、心身の発達にどんな障害がある方に対しても、研究をする側・される側が尊重し合い、「ぬくもり」を感じ合いながら、研究を推進し、障害のある方の意志や主体性、生きがい、自己実現などに本当に役に立つ療育のための「科学」を目指しています。それゆえ、療育の現場で障害のある方々の息遣いを感じながらのフィールド研究も実験室的研究と同じく大切です。この研究戦略により、

普段は見落としがちな微細な特性や「あなたらしさ」にも気づくことができると考えます。心身の発達に障害のある方が現実に生活している姿から、真実を学ぼうとするこの姿勢は、ものごとを科学的に追究する研究態度とまったく矛盾しないと教育福祉学部は考えます。

教育福祉学部が本年度、研究の推進のために連携した諸施設等はコロニー中央病院、コロニーこばと学園、コロニー運用部などです。

短期母子療育プログラムの評価方法に関する研究（2）

竹澤大史

コロニーの短期母子療育施設「緑の家」では、心身の発達に遅れや障害のある子どもの養育者を対象とした支援プログラムを実施しているが、その効果を客観的に評価する方法は確立されていない。そこで養育者の抑うつ度及び育児ストレスを指標とした効果測定を試行し、支援プログラムの評価方法としての適用可能性を検証した。2008年5月から2009年1月にかけて、プログラムに参加した養育者計36名（男女比＝36：0，平均年齢＝36.6±5.6歳）の抑うつ度（ベック抑うつ質問票：BDI-Ⅱ）と育児ストレス（育児ストレスインデックス：PSI）を測定し、プログラム参加前後の変化を調べた。プログラム終了時に27名（75.0%）の抑うつ得点が低下し、グループ全体の得点平均値も有意に低下した（t=4.12，p<0.01）。また25名（69.4%）の育児ストレス得点が低下し、グループ全体の得点平均値も有意に低下した（t=3.03，p<0.01）。しかし終了時から1ヵ月後の測定では、養育者の抑うつ度及び親として感じるストレスが高くなる傾向がみられた。プログラムに参加することによって一旦は軽減された養育者の不安感やストレスが、しばらくすると再び高い状態になる可能性が示唆された。以上のことから、プログラムの終了後も定期的な測定を通して養育者の抑うつ度や育児ストレスの状態を調べるとともに、フォローアップの機会を設けるなど、養育者を継続的に支援していく体制の充実が求められる。

快情動場形成に関する量子力学的検討の試み ―乗馬療法を題材として―

舟橋　厚

広汎性発達障害児にpsycho-educationalな乗馬療法を体験させると問題行動の低減や社会的行動（コミュニケーション能力など）の促進が頻繁に生起する。この現象についての神経心理学的な理論としては1）脳内の情報処理の混乱の回避、2）扁桃体や前頭前野などの情動回路による不快刺激への過剰反応の制御、さらに、3）線条体による報酬系回路を通じて社会的報酬が上記、情動回路に快情報として伝達され、快情動場が形成されることなどを提案した。この快情動場は、本来心理学的な場の概念であるが、1）量子力学的な場の概念と極めて親和性が高く、2）前述の脳内情動回路や報酬系に深く関係する。故に1）量子数理的な快情動場の表現、2）扁桃体・前頭前野などの情動回路や線条体による報酬回路の機能解剖学的な裏付け、3）障害児・者の対人行動の改善の過程、を長期的な3つの検討課題とし、本研究では、その第一歩として乗馬療法実施前後における広汎性発達障害児の行動変化を母親がどのように把握しているかについて、15個のコミュニケーション能力に関する概念による可視化モデルを量子力学的数理解析により検討した。乗馬療法実施前は「笑顔」、「他者とのコミュニケーション」などのポジテイブな項目と対極な領域にあった「不安」、「こだわりがある」、「いらだつ」、「自宅」、「ジェスチャー」などの項目のうち「自宅」と「ジェスチャー」が、乗馬療法実施6ヶ月後には「笑顔」、「他者とのコミュニケーション」が存在する矢印と相関が高い矢印（r＝0.9397）上に移動していた。

療育現場で発生するトラブルの迅速な解決を行うための地域社会システム作りに関する研究

舟橋　厚、慶野裕美、長谷川桜子、竹澤大史

知的障害や自閉症などの発達障害者の地域移行の過程や日常の療育現場で発生する小規模なトラブルに対して、パーソン・センタード・ケアに基づいた迅速で的確なケアおよびケアリングを行うことは療育をする側、される側の双方にとって大切である。コロニー内で発生した具体的なトラブルケースの行動分析を行うと、個人情報を伏せたにせよ、当事者に与える刺激が強すぎる場合があり、そうした際には、むしろ理論的なモデルによる検討が有効である。今回はこうした理論的な検討を社会心理学の理論（ハイダーのバランス理論）と快情動場形成の点から行った。ハイダーのバランス理論では、人は三者関係の認知がインバランスな状態にあり認知的不協和が存在すると、認知的不協和を低減させようと、自らの認知を変えようと行動するとされる。例えば、障害のある本人、保護者、療育支援を行う施設職員の3者関係を考えた場合、これら3者間の認知的インバランス状態を認知的なバランス状態に導くためのパターンの組み合わせは多数存在する。その中で何を選択すると本人の心の安定が促進されるかについては、バランス理論だけでは限界があり、認知レベルでのバランス以外に、より感情的（情動的）な側面が重要であることがダマシオのソマテ

イックマーカー仮説により導かれる。つまり、認知の主体である本人（例えば、障害のある本人あるいは保護者）にポジテイブな心理学的な情動場が形成されたか否かが重要であり、このポジテイブな情動場の形成の有無をケアリングしていくことが療育現場でのトラブル解消あるいはトラブル発生を未然に防ぐことに繋がる可能性が示唆された。

広汎性発達障害児への乗馬活動による療育支援効果

慶野裕美、慶野宏臣[1]、美和千尋[2]、川喜田健司[3]、長谷川桜子、竹澤大史、舟橋　厚

近年、動物介在療法（AT）が広汎性発達障害児（PDD児）の社会的能力の発現に大きな影響を与えることが報告されている。われわれもPDD児の支援としてATの一つである乗馬療育活動を行ってきた。さらにいわゆる問題行動改善を目的とした乗馬療育プログラムと言葉の促進目的とした乗馬療育プログラムを作成、試行したところ、乗馬活動の場で、PDD児のパニックが減る、対人関係が改善される、順番を待つことができる、コミュニケーションの改善がみられるなどの行動変化が観察された。そこで本年度は、このような乗馬活動の場で見られた療育的、心理的効果が、PDD児の日常生活でどの程度、維持・反映されるかを検討するため、日ごろ児童と最も接触頻度が多い親たちが乗馬活動前と乗馬活動後の児童の日常生活上の行動変容をどのように感じているかについて質問紙により検討した。

乗馬活動群23名と非乗馬活動群30名を対象に両群の親へ質問紙調査を実施した。その結果、いわゆる問題行動に関して、1）気持の切り替えができますか、2）パニックを起こしますか、3）順番を待つことができますか、4）落ち着きなく動き回りますか、5）友達関係に問題はありますかの5項目において両群の間に有意差が認められた。コミュニケーションに関する項目に関しては、1）ごっこ遊びがありますか、2）両親の呼びかけに答えますか、3）子供同士で遊びますか、4）意思表示の合図がありますか、5）言葉かけを理解しますか、6）感情がよく表情に現れますかの6項目において両群の間に有意差が認められた。以上のことから、乗馬活動の効果はPDD児の日常生活にも反映されていると考えられる。

[1]障害者乗馬レモンクラブ、[2]名古屋大・医、[3]明治国際医療大

地域で生活している重症心身障害のある人たちの日中活動に関するニーズ

長谷川桜子、三浦清邦[1]、小森　拓[2]、竹澤大史、慶野裕美、舟橋　厚、細川昌則[3]

名古屋市を除く愛知県で地域生活を送っている人全員を対象とした実態調査への回答（1,131通；回答率53.5%）から、日中活動の場を選ぶ際に特に重視する条件を問う質問について分析した。

記入者の85.5%は母親であった。回答者の82.0%は、日常生活のために、経管栄養や気管吸引、定期薬の服用など、家庭で何らかの医療的処置を必要としていた。また35.5%の人は、日中を主に家で過ごしていた。

サービスや活動の内容について記述した13項目から、日中活動の場を選ぶ際に重視する条件を5つまで選択してもらったところ、回答者全体では「送迎がある」（62.6%）と「医療的ケアが受けられる」（61.5%）を選んだ人が順に多かった。この2つはまた、10歳未満、10歳代、20歳代、30歳代、40歳以上のすべての年代で、40%以上の人に選択されていた。「機能訓練・リハビリテーションが受けられる」と「年齢の近い仲間がいる」は、20歳代以下の各年代では40%以上の人に選択されたが、それより高い年代での選択率は低かった。「入浴できる」は10歳代以上の各年代で40%以上の人に選択されたが、10歳未満の選択者は少なかった。

重症心身障害のある人の日中活動に関するニーズには、日常の医療的ケアや送迎のようなすべての年代に共通して一般的なものと、機能訓練や同年代の仲間との活動、入浴支援のようなライフステージに応じたものがあった。前者は、日中活動の内容というより参加するための要件であり、ライフステージに応じた活動内容を選択し、実現するための基盤と理解できる。まずは、医療的ケアや送迎のような、日中活動への参加に必要な支援の提供体制を整備することが喫緊の課題といえよう。

[1]豊田市こども発達センター、[2]こばと学園、[3]所長

研究業績

著書・総説

舟橋　厚：療育に活かす脳科学（コレール社）2008.

長谷川桜子：知的障害者福祉法．発達障害基本用語事典，日本発達障害学会（監）（金子書房），pp 143-144，2008.

長谷川桜子：認知的学習ー第3節 知能の生涯発達変化ー．知的・発達障害児の学習ー心理と指導支援ー，梅谷忠勇（編著）（田研出版），pp 38-50，2009.

原著論文

Saitoh Y[1], Matsui F, Chiba Y, Kawamura N, Keino H, Satoh M, Kumagai N, Ishii S, Yoshikawa K, Shimada A, Maeda N[2], Oohira A, Hosokawa M ([1]Hyogo College Med, [2]Tokyo Metropolitan Inst Neurosci) : Reduced expression of MAb6B4 epitopes on chondroitin sulfate proteoglycan aggrecan in perinerronal nets from cerebral cortices of SAMP10 mice: A model for age-dependent neurodegeneration. *J Neurosci Res* 86 : 1316-1323, 2008.

慶野宏臣[1], 慶野裕美, 川喜田健司[2], 美和千尋[3], 舟橋　厚 ([1]障害者乗馬レモンクラブ, [2]明治国際医療大, [3]名古屋大) : 広汎性発達障害を持つ子どもたちが乗馬活動することによる療育支援効果発現とその経過. ヒトと動物の関係学会誌 20 : 74-81, 2008.

慶野裕美, 川喜田健司[1], 田谷　充[2], 荒谷穣治[2], 田谷与一[3], 慶野宏臣[4] ([1]明治国際医療大, [2]グリーンポート小松, [3]石川障害者乗馬を推進する会, [4]障害者乗馬レモンクラブ) : 乗馬セラピーにおける認知症患者の記憶. 馬の科学 45 : 217-221, 2008.

慶野裕美, 川喜田健司[1], 田谷　充[2], 田谷与一[3], 細川昌則, 舟橋　厚, 長谷川桜子, 竹澤大史, 慶野宏臣[4] ([1]明治国際医療大, [2]グリーンポート小松, [3]石川障害者乗馬を推進する会, [4]障害者乗馬レモンクラブ) : 高齢者における乗馬活動の効果―高齢者、健常児・者および障害児・者の乗馬活動中の表情変化を比較して―. *Hippophile* 34 : 14-20, 2008.

松本陽子[1], 北川美由紀[1], 鈴木弥生[2], 長谷川桜子, 松本昭子[1] ([1]こばと学園, [2]中央病院) : 重症心身障害児（者）のQOLに関する研究―新しいこばと版QOL評価質問表作成の試み―. 重症心身障害の療育 3(2) : 199-207, 2008.

その他の印刷物

竹澤大史 : 広汎性発達障害児の養育者のためのサイコエデュケーションプログラムの開発. コロニーだより 353 : p3, 2008.

舟橋　厚 :「飛躍をもたらすマジカルワード」『療育に生かす脳科学』. 教育と福祉の特別支援ジャーナル（WEB版）22, 〈http://www.colere.co.jp/kiji/kiji9-11.html〉コレール社, 2008.

舟橋　厚 :「愛ある科学に支えられる愛ある療育」『療育に生かす脳科学』. 教育と福祉の特別支援ジャーナル（WEB版）23, 〈http://www.colere.co.jp/kiji/kiji9-12.html〉コレール社, 2008.

舟橋　厚 :「社会性のレベルアップの決め手は創造性」『療育に生かす脳科学』. 教育と福祉の特別支援ジャーナル（WEB版）24, 〈http://www.colere.co.jp/kiji/kiji9-13.html〉コレール社, 2008.

舟橋　厚 :「共感性の発達に効く他者からの厚き信頼」『療育に生かす脳科学』. 教育と福祉の特別支援ジャーナル（WEB版）25, 〈http://www.colere.co.jp/kiji/kiji9-14.html〉コレール社, 2008.

舟橋　厚 :「Q＆Aコーナー」『舟橋厚先生の療育相談コーナー』. 教育と福祉の特別支援ジャーナル（WEB版）, 〈http://www.j-forum.jp/colere/colere-member/ryouiku/qa1.php〉コレール社, 2008.

舟橋　厚 :「縄張り意識の暴走を制御する思いやり能力」『療育に生かす脳科学』. 教育と福祉の特別支援ジャーナル（WEB版）26, 〈http://www.colere.co.jp/kiji/kiji9-15.html〉コレール社, 2009.

舟橋　厚 :「療育の質をきめる“3種の神器”」『療育に生かす脳科学』. 教育と福祉の特別支援ジャーナル（WEB版）27, 〈http://www.colere.co.jp/kiji/kiji9-16.html〉コレール社, 2009.

長谷川桜子 : コロニープロジェクト研究から―知的障害のある人向けの認知症スケールの作成―. コロニーだより 357 : p2, 2009.

竹澤大史, 鈴木麻秩子[1,2], 山本桂子[1,2], 笠原伸洋[2], 小松則登[2], 森祐美子[2], 吉村育子[2], 菱田　学[2], 吉川徹[3], 長谷川桜子, 慶野裕美, 舟橋　厚, 細川昌則 ([1]療育支援課, [2]中央病院, [3]名古屋大) : 広汎性発達障害児の養育者に対するサイコエデュケーションプログラムの開発. 平成20年度愛知県心身障害者コロニープロジェクト研究報告書, pp 19-22, 2009.

北川美由紀[1], 松本陽子[1], 松本昭子[1], 鈴木弥生[2], 長谷川桜子 ([1]こばと学園, [2]中央病院) : こばと学園における重症心身障害児（者）のQOLに関する研究―こばと版QOL評価質問紙の実用化に向けての取り組みとその活用について―. 平成20年度愛知県心身障害者コロニープロジェクト研究報告書, pp 25-28, 2009.

丸山幸一[1], 吉田　太[1], 鈴木基正[1], 長谷川桜子, 小森拓[2], 熊谷俊幸[2], 三浦清邦[3] ([1]中央病院, [2]こばと学園, [3]豊田市こども発達センター) : コロニー中央病院小児神経科から地域医療機関に紹介した成人患者の追跡調査. 平成20年度愛知県心身障害者コロニープロジェクト研究報告書, pp 34-37, 2009.

学会発表

松本昭子[1], 宮崎修次[1], 長谷川桜子 ([1]こばと学園) : 重症心身障害児（者）のQOL評価表作成の試み. 日本小児神経学会総会（東京）2008.5.29.

Hasegawa S, Miura K[1], Komori T[2], Takezawa T, Keino H, Funahashi A, Hosokawa M ([1]Toyota Municipal Child

Dev Ctr, [2]Kobato Gakuen)：The needs regarding daytime activities of people with SMID in the community. International Association for the Scientific Study of Intellectual Disability World Congress (Cape Town) 2008.8.28.

Matsumoto A[1], Matsumoto Y[1], Kitagawa M[1], Suzuki Y[2], Niimi T[1], Nakano T[1], Murakami M[1], Hamada H[1], Hasegawa S ([1]Kobato Gakuen, [2]Ctrl Hosp)：New objective QOL assessment questionnaire for SMIDS. International association for the Scientific Study of Intellectual Disability World Congress (Cape Town) 2008.8.29.

Mizukami K[1], Terada S[2], Hasegawa S, Katada A[3] ([1]Jin-ai Univ, [2]Kochi Univ, [3]Chubu Gakuin Univ)：Chronological changes in the basic EEG rhythm in the elderly. World Congress of Psychophysiology (St. Petersburg) 2008.9.9.

慶野裕美，舟橋　厚：広汎性発達障害児に乗馬療育がおよぼす効果．自閉症スペクトラム学会（仙台）2008.9.14.

慶野裕美，慶野宏臣[1]，美和千尋[2]，川喜田健司[3]，長谷川桜子，竹澤大史，細川昌則，舟橋　厚（[1]障害者乗馬レモンクラブ，[2]名古屋大，[3]明治国際医療大）：障害者乗馬活動が導く広汎性発達障害児への療育支援効果．動物介在教育・療法学会（東京）2008.11.9.

慶野宏臣[1]，慶野裕美（[1]障害者乗馬レモンクラブ）：広汎性発達障害児を対象とした障害者乗馬活動で「待つ」ことの指導プログラム．ヒトと動物の関係学会（東京）2009.3.8.

講演など

竹澤大史：お子さんの理解と支援のために．短期母子療育施設・緑の家（コロニー）2008.4.23.～2008.12.17.

竹澤大史：「発達障害児のソーシャルスキルトレーニング」．子ども環境学会2008年大会シンポジウム『子どもの心にぽっと希望の光をともす工夫ー思いやり・共感性をいかに育むかー』（名古屋）2008.4.27.

慶野裕美：「子どもの生きがいを支える乗馬療法」子ども環境学会2008年大会シンポジウム『子どもの心にぽっと希望の光をともす工夫ー思いやり・共感性をいかに育むかー』（名古屋）2008.4.27.

舟橋　厚：「感情脳（快感情）を重視した療育ー障害者の相互援助行動を中心にー」子ども環境学会2008年大会シンポジウム『子どもの心にぽっと希望の光をともす工夫ー思いやり・共感性をいかに育むかー』（名古屋）2008.4.27.

舟橋　厚：「障害を個性と認め楽しく暮らすー脳科学から見た個性とはー」愛知県赤十字救助奉仕団 講演会（名古屋）2008.8.31.

舟橋　厚：「心と脳の活性化ー主体性・能動性・快感情が決め手」日本ＬＤ学会 公開シンポジウム 特別講演（名古屋）2008.11.15.

舟橋　厚：「ほんの人さじの脳の知識が療育・教育の質を高めます」愛知県立春日台養護学校 平成20年度 親の会 講演会（春日井）2009.2.20.

舟橋　厚：「心と脳に喜楽を呼び込み、“Yes, we can!”」愛知県立名古屋聾学校全校研修 講演会（名古屋）2009.2.25.

その他の研究活動

海外活動

長谷川桜子：第13回国際知的障害研究協会世界大会に出席，研究発表（南アフリカ共和国）
2008.8.25.～2008.8.30.

長谷川桜子：第14回世界生理心理学会議に出席，研究発表（ロシア連邦）　2008.9.8.～2008.9.13.

地域活動

慶野裕美：障害者乗馬レモンクラブ活動（犬山）
2008.4.～2009.3.

慶野裕美：中部大学倫理審査委員（春日井）
2008.4.～2009.3.

舟橋　厚：障害児乗馬療法の実践研究（ヒトと馬のインターラクション研究会との共同研究）
2008.4.～2009.3.

舟橋　厚：地域療育支援部門検討会議委員（コロニー）
2008.4.～2009.3.

竹澤大史：春日台養護学校・はるひ台学園サポートネットワーク会議（コロニー）2008.4～2009.3.

竹澤大史：春日井市子育て教室アドバイザー（春日井）
2008.5.30.～2009.2.27.

竹澤大史：春日井市子育てネットワーク会議（春日井）
2008.7.10.～2008.11.27.

教育活動

慶野裕美：アニマルセラピー（名古屋経営短期大学健康福祉学科）　2008.4.1.～2008.9.28.

慶野裕美：動物介在健康医学（中部大学生命健康科学部生命医科学科）　2008.9.20.～2009.3.31.

慶野裕美：小児神経精神障害作業療法学（名古屋大学医学部保健学科）　2008.10.1.～2009.3.31.

舟橋　厚：発達生理学（愛知県立看護大学）
2008.10.1.～2009.3.31.